

2026/8/18 現在 2 名募集中です

2 歳から 100 歳までの精神科を包括的に学べる日本唯一の精神科研修プログラムです。

向学心ある専攻医の皆様、共に働き、学びましょう！！

精神科領域専門医研修プログラム

2027 年度

**大阪市立総合医療センター
精神科専門医研修プログラム**



専門研修プログラム名

大阪市立総合医療センター 精神科専門医研修プログラム



プログラム担当者 氏名： 宮脇 大（みやわき だい）

住所 〒 534 0021 大阪市都島区都島本通 2 13 22

電話：06-6929-1221

E-mail：d-miyawaki@med.osakacity-hp.or.jp



専攻医の募集人数 2 人

専門研修プログラム名	大阪市立総合医療センター 精神科専門医研修プログラム
領域	精神科領域
基幹施設	大阪市立総合医療センター
プログラム統括責任者	宮脇 大

I 専門研修プログラムの概要

2 歳から 100 歳までの精神医学を包括的に学べることを特色とする精神科研修プログラムである。大阪市立総合医療センターは、許可病床数 1,063 床、9 つの臓器別センター、57 の診療科を擁し、がん医療、小児医療などの高度・専門的医療に加え、周産期医療、3 次救急・小児 3 次救急、感染症医療、精神科救急・合併症医療、災害医療などの政策医療を担う大阪市の中核病院である。

精神科領域は、18 歳以上を対象とする 28 床の精神神経科病棟と、18 歳未満を対象とする 27 床の児童青年精神科病棟の 2 科・2 病棟からなり、「2 歳から 100 歳まで」の全年齢層に包括的な精神科医療を提供している。精神神経科では、統合失調症、気分症、認知症、摂食症等の診療に加え、m-ECT、精神科救急、緊急措置・措置入院、精神科身体合併症医療、コンサルテーション・リエゾン精神医学、緩和医療を経験できる。

児童青年精神科では、摂食症、不安症、虐待などのトラウマ関連精神障害、神経発達症など、幅広い児童・思春期精神疾患の診断・治療・マネジメントを学ぶ。看護師、公認心理師、精神保健福祉士、院内学級教員と密に連携し、多職種による児童精神科チーム医療を実践する。小児医療センターを有する総合病院の特性を生かし、小児リエゾンや小児緩和ケアにも関与する。

精神神経科・児童青年精神科それぞれのカンファレンス、症例検討会、両科合同カンファレンス等を通して症例理解を深め、治療関係を含む精神療法的関与、薬物療法等を系統的に学ぶ。また、リサーチマインドを涵養するため、学会発表・論文作成の指導体制も整備している。

II 専門研修はどのように行われるのか

「2 歳から 100 歳まで」の精神科診療ができる当院の強みを生かし、研修プログラムは専攻医の到達度と希望に応じて柔軟に運用する。

専攻医 1 年目から精神神経科および児童青年精神科の両科で研修を行う。例えば、両科での研修を並行しながら、それぞれを重点的に半年ずつ研修する。2 年目は連携施設のうち 2 病院で 6 か月ずつ、計 1 年間研修する。精神科救急やリハビリテーションを含め幅広い症例を経験し、薬物療法、生物学的検査・心理検査、精神保健福祉法、社会資源の活用について技能を深める。2 年目修了時点で精神科診療の全領域をカバーし、精神科専門医および精神保健指定医取得に必要な症例経験を十分に積むことを目指す。

3 年目は専攻医それぞれの志向に合わせて、さらに柔軟に研修する。児童精神科医を目指して児童青年精神科を中心に研鑽する、総合病院精神医学を志向して精神神経科を中心に研修する、あるいは全年齢を診療できるバランスの取れた精神科医を目指して両科を研修するなど、個別化したローテーションが可能である。

Ⅲ 専攻医の到達目標

1. 修得すべき知識・技能・態度

患者及び家族との面接、疾患概念・病態の理解、診断と治療計画、補助検査法、薬物・身体療法、精神療法、心理社会的療法、精神科救急、リエゾン・コンサルテーション精神医学、法と精神医学、災害精神医学、医の倫理、安全管理を修得する。

2. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

入院時には医師、看護師、公認心理師、精神保健福祉士などが参加する多職種カンファレンスを行い、治療方針、家族支援、退院支援を多角的に検討する。措置入院や m-ECT についても定期的に検討する。コンサルテーション・リエゾン精神医療、認知症ケアサポートチーム、緩和ケアチームでも多職種医療を経験する。児童青年精神科では、集団心理療法や SST、院内学級教員を含む多職種カンファレンス、患者・養育者・原籍校教員を含む退院前カンファレンス等を通じて、チーム医療の実践力を高める。

3. 学問的姿勢

経験症例について指導医から学問的姿勢の指導を受け、科内カンファレンスでプレゼンテーションを行う。興味ある症例について文献的検討を行い、日本精神神経学会、日本児童青年精神医学会、日本総合病院精神医学会、近畿精神神経学会などでの発表を目指す。学会発表・論文作成を通じてリサーチマインドを養う。

4. コアコンピテンシー、倫理性、社会性

研修期間を通じて、患者関係の構築、チーム医療の実践、安全管理、症例プレゼンテーション技術、医療における社会的・組織的・倫理的側面の理解を到達目標とする。さらに、精神科診断面接、精神療法、精神科薬物療法、リエゾン・コンサルテーション等、精神科医に固有のコンピテンシーを獲得する。

Ⅳ 年次ごとの研修計画

専攻医 1 年目

精神神経科と児童青年精神科の両科で研修する。統合失調症、気分症、器質性精神障害等を受け持ち、面接、診断・治療計画、薬物療法、支持的精神療法の基本を学ぶ。リエゾン精神医学、精神科救急、精神保健福祉法に基づく行動制限等を経験する。児童期患者では、神経発達症の発達アセスメント、不安症、摂食症、トラウマ関連精神障害等の診療能力を養い、心理教育や行動療法を含む心理療法を指導下に実践する。

専攻医 2 年目

連携病院で社会復帰支援を含む地域精神医療を経験し、心理社会的療法、保健・福祉システムについて学ぶ。精神科救急を含む診断・治療計画、薬物療法の技能を高め、外来主治医として神経症性障害や依存症の診断・治療も経験する。

専攻医 3 年目

大阪市立総合医療センターの児童青年精神科および精神神経科で、難治例も経験しつつ、指導医から自立して診療できる水準まで診療技法を高める。学会・研究会で積極的に症例発表し、条件が整えば論文発表や臨床研究に参画する。専門医取得後のサブスペシャリティを見据えた臨床経験を積む。

V 研修施設群と地域医療

各連携施設は専攻医教育の実績が豊富で、基幹施設と密接な交流がある。専攻医が重点的に学ぶべき領域や希望を考慮して研修先を選定する。2026 年度提出資料に記載された主な連携施設として、大阪公立大学医学部附属病院、浅香山病院、浜寺病院、丹比荘病院、さわ病院、小阪病院等が挙げられている。児童青年精神科では地域の学校、児童相談所等との連携を学び、連携施設ではデイケア、グループホーム等を活用した社会復帰支援・地域精神医療を経験する。

VI 専門研修の評価・修了判定

プログラム統括責任者（宮脇 大）およびプログラム管理委員会が研修状況を定期的に評価し、必要に応じて改善を行う。指導医は専攻医と2～3 か月ごとにカリキュラムの進行状況を確認し、その後の研修方法を定める。指導責任者は6 か月ごとに、各指導医からの報告および多職種からの評価を基に研修目標の達成度を評価し、専攻医にフィードバックする。修了判定はプログラム管理委員会の評価に基づき、プログラム統括責任者が行う。

VII 専門研修管理委員会

プログラム統括責任者の宮脇 大、副統括責任者の甲斐 利弘を中心に、連携施設担当者および専門研修指導医で委員会を組織し、個々の専攻医の研修状況を管理・改善する。プログラム内容について定期的に討議し、継続的な改良を行う。

VIII 専攻医の就業環境

研修施設の責任者は、専攻医のために適切な労働環境を整備し、心身の健康維持に配慮する。勤務時間は週 40 時間を基本とし、時間外勤務は月 80 時間を超えないこと、適切な休日を保証すること、当直業務と時間外診療業務を区別し適切な対価を支給すること、夜間診療業務に対するバックアップ体制を整備すること等を基本方針とする。就業は各研修施設の就業規則に則る。

IX 採用、研修の休止・中断、サイトビジット

専攻医の採用は、プログラム統括責任者（宮脇 大）、副統括責任者（甲斐 利弘）および人事担当者を中心に実施する。研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修については、専攻医の申出によりプログラム管理委員会で審議し、日本精神神経学会に報告する。サイトビジット（訪問調査）は適宜受け入れる。

X 主な専門研修指導医

宮脇 大（大阪市立総合医療センター 児童青年精神科部長）

甲斐 利弘（大阪市立総合医療センター 精神神経科部長）

出口 裕彦（大阪公立大学医学部附属病院 神経精神科准教授）

田中 秀樹（浅香山病院 精神科副院長）

渡邊 治夫（さわ病院 院長代行）

古塚 大介（ほくとクリニック病院 院長）

木岡 哲郎（浜寺病院 院長）

池谷 俊哉（丹比荘病院 院長）

斎藤 真喜子（小阪病院 院長）

XI Subspecialty 領域との連続性

当院は、一般病院連携精神医学専門医、子どものこころ専門医、日本児童青年精神科認定医・児童精神科専門医、日本精神科救急学会認定医などがすべて取得できる本邦でも希少な施設である。研修後の幅広いサブスペシャリティ領域につながる臨床経験を積むことができる。